

キャリア教育で学校を変える。教師が変わる。

残りの教員人生を 消化試合にはしたくない



埼玉県立岩槻商業高校
3学年主任

小境幸子

こざかい・こうこ ●1958年生まれ。武蔵野女子大学(現武蔵野大学)文学部卒業後、埼玉県立上尾沼南高校(現上尾鷹の台高校)に赴任。行田高校(現進修館高校)、久喜高校を経て、2002年より岩槻商業高校に勤務。08年に教職大学院進学のため1年間休職。教科は国語。

文／堀水潤 撮影／渡邊力(P.62上、64除く)

埼玉県東部に位置する旧岩槻市は、日本有数の生産量をほこる人形の町だ。2005年にさいたま市に編入し、岩槻区となった今もどこか独立した地域のような雰囲気を保つ。住民の郷土愛も強い。

1918年創立の埼玉県立岩槻商業高校(以下、岩商)も昔から地元可愛さ、地域と連携を深めてきた。特に近年は、「実践的職業教育推進プロジェクト」など県のさまざまな事業の委嘱を受けながら、オリジナル和菓子を開発やインターネットショッピングモールの

開設といった先進的な取り組みで注目を集めている。そうした商業高校(商業科、情報処理科)ならではの実践の陰で、進路指導あるいは教科指導の研鑽に努めてきた教員の一人が、小境幸子だ。「ごく普通の国語科教員」であったが、50代に入り1年間休職し、開設初年度の教職大学院に進学。復職後、学びを実践に生かそうともがいている。

「優れた実践をしているわけではなく、リーダーシップにも欠く、劣等感だらけの教員ですが、ありのままの自分をさらけ出すことで、誰かの参考になるなら」という言葉を尊重し、等身大の姿を描く。

● 岩商に赴任するまで、小境はタイプの異なる3つの高校で計21年間勤務した。

初任校では、多くの若手がそうであるように、目の前の生徒の対応に追われた。「当時の生徒に会うと、『あのころ、先生



頑張っていたよね」と言われるくらいです
から、わけもわからず必死でやっていたん
でしょう」

2校めは商業科と普通科の併設校。の
んびりとした普通科の生徒に比べ、常に
就職を念頭に置いて行動する商業科の
生徒の、意識の高さを感じた。目指すも
のによつて教育の自身は変わるものだと
実感した。3校めは伝統ある女子高。職
員室の入り口ですれ違ふと、すつと身を
引くなど、家庭での躰が行き届いたよう
な、お嬢さんの多い学校だった。

「教員が教員然としていられる学校で、
正直、心地いい場所でした」

いつぼう、何となく流れる良妻賢母を
是とする空気にはこそり反発していた。
「自分のクラスでは、『結婚はゴールではな
い。女性も自立し、経済力をもたなけれ
ば』、いつも言っていました」

不登校への対応が多くなったのもこの
時期だ。個が確立している生徒が多いな
か、前記のような校風に息苦しさを感じ
ている生徒もいた。友人に見せる顔を無
理して作っているらしい。そうした生徒に
は、本当の自分をさらけ出していいことを

論し、自分を取り戻してもらった。

教育相談にかんするさまざまな研修
会に参加してわかったのは、技術的なこと
以上に大切なのは、その子にあった対応を
懸命に考えること。生徒思いでやさしく、
何でも相談に乗ってくれる先生という、生
徒からの評価は、今も変わらない。

進路指導主事としての仕事

岩商に赴任したのは02年のことだ。前
述のように岩槻は、地場産業が盛んで、住
民同士の結びつきが強い。翌年、小林良二
校長(当時)が赴任すると、地域連携の取
り組みは一気に加速した。商業科、情報
処理科共に3年次必修となる「課題研
究」では、各種の資格取得講座や体験学
習の中から一つを選択するのだが、その選
択肢として新たに、地元和菓子店と協
力して岩商オリジナルの菓子を創作する
「商品開発」と、同じく老舗人形店と連
携し人形づくりなどを行う「地場産業」
という講座が加わった。

普通科目の教員である小境は、こうし
た取り組みに直接かかわっていたわけで

はないが、地域の教育力を感じた。
「地域の方々が、学校を好意的な目で見
てくれていると感じました。地元の若者
を自分たちで育てようという雰囲気があ
ったんです」

この時期、産休・育休から復職したばか
りの外崎潤子(現 商業科主任)に言わせ
れば、「戻ってきたら別の学校のようににな
っていた」と言うほどだから、よほど大きな
変革だったのだろう。外崎は言う。

「どこかおとりした学校だったのが、商
品開発だ、地域連携だ、金融教育だ、と
いう具合に、教職員も生徒も、みんなが
走っているという印象。活気があって、『い
つたい、何が起きたんだろう』という感じ
でした」

そんななか、47歳になった小境は進路
指導主事となる。前任校でもほぼ一貫し
て進路指導を担当していたものの、就職
指導に関しては明るくないため不安はあ
った。いつぼうで、学年全体の進路を保証
する立場となり、やる気にあふれた。

「これまでのように自分のクラスの生徒
だけではなく、学年全体、学校全体を見
渡す意識が高まりました」

同校では、地元経済人から起業家マイ
ンドを学ぶ「岩商起業家派遣塾」や、企業
の人事担当者などが模擬面接官を引き
受けてくれる「面接指導」のほか、「卒業
生による体験談会」「職業レディネステス

ト」などを実施していたが、それらを踏襲
しつつ、改良を加えていった。

埼玉県高等学校進路指導研究会など
を通して、外部とかわる機会も増えた。

「さまざまな学校や先生の取り組みに
触れ、進路指導とは広く深いことを、逆
に、自分の至らなさを感じていました」

インターシップの導入

岩商の生徒は、「純朴で素直。人懐っこ
く、与えられたことに対しては地道に努
力するものの、やや自発性に欠ける傾向
がある」と小境。

進路指導主事となり、かわる生徒が
一気に増え、就職先とのやりとりが多く
なったことで、社会になじめず、もがいてい
る卒業生の姿も目に映るようになってき
たと言ふ。

「コツコツタイプで、成績も良かった子さ
え、そうした状態になっていました。学校
の中で見ていた生徒像と、実社会での人
物像は当然、異なります。自分が校内で
見ていたのは、一面でしかないことを、改め
て突きつけられた思いでした」

早期離職者の中に、前年、担任として
送り出したAさんがいた。彼女は、メーカ
ーに事務職として採用されたが、製造現
場に配置転換されたことがきっかけで体
調を崩し、1年足らずで退職していた。小



上.岩槻まつりに参加するインターアクトクラブの生徒
下.地元人形店との連携で製作したオリジナル人形

境は、在学中、Aさんが友人との会話の中で何気なく発していた「働くなんて簡単」という言葉を思い出した。

「彼女は在学中、飲食店でアルバイトをしていました。社員並みの仕事をこなしていたことからでた言葉らしいのですが、私は、本当にそうだろうか、正社員として働くことは簡単なことではないぞ、と引っかかっていました。ただ、当時は求人も好調で、卒業生が苦勞しているという話もあまり聞こえてこなかったため、就職さえすれば普通にやっつけていけるだろうと思いをこめていたところがあります」

そのAさんが早期退職したという話を聞き、小境は、アルバイトで培った勤務観が、社員として働く際にギャップを生んでいるのではないかと危惧するようになった。

「空いた時間に、好きな仕事で、手軽に稼

げるアルバイトと、そうではない正社員とは異なります。アルバイト経験者が多い学校だけに、在学中、正社員同然に働く経験が必要だと強く感じました。それがインターンシップです」

さっそく校内での議論を経てインターンシップ推進委員会を設立。1年間かけて準備をした。他校でインターンシップを経験している教員も多く、反対者はいなかったが、意見がわかれたのは、対象を希望者に限定するか、全員参加とするかという点だ。「中には、外に出して事業所に迷惑をかける生徒もいるのではないかと求人に影響は出ないだろうか」と危惧する教員に、小境は持論を貫いた。

「確かに、大変な子もいます。けれど、そうした子をそのまま卒業させてしまえば、社会のなかで支障をきたしてしま

生徒の顔は多様。

普段とは違う顔にも

思いをさせて

ます。高校生のうちに少しでも解決の機会を与えたい、という一心でした」

こうした議論の過程で、同校で育てた人物像が浮かび上がってきたと小境は言う。それは、地域社会で活躍できる人材、地域に貢献できる人材だ。そうであるならば、早いうちに地域に出す必要がある。しかもありがたいことに、この地域には生徒を受け入れてくれる気概があるのだから。

おのずと、対象者は全員に決まった。

事業所の開拓は比較的スムーズに運んだ。さまざまなツテを頼り、足を棒にして頑張った結果、依頼した約200事業所のうち約60事業所が受け入れを表明。校長自らが、熱心に訪問したことが、事業所側の対応を早くしたという。

こうして、2年生全員、約180人を対

象にした5日間のインターンシップがスタート。小境は、すぐに変化を感じた。「学校でふてくされていたような生徒が、職場では生き生きと働いていました。そういう見方で、その生徒の学校での様子を見るようになると、今まで私が気づかなかっただけで、実は、普段から生き生きとした顔を見せているんですね。ひとつしたら、インターンシップで自分の新たな面をみつけ、変わったのかもしれないが、いずれにしろ、そうした変化を、私も、生徒にももたらしてくれた気がしました」

教職大学院に進学

進路指導主事になって3年めの07年には、参加した教員研修センターの「中央研修」では、消化しきれないほどのメニューに圧倒され、いっそう進路指導の奥深さと、自分に足りないことの多さを痛感した。

そんな折、当時、上越教育大学で教鞭をとっていた三村隆男教授が、翌08年度に発足する早稲田大学の教職大学院に移るといふ話を耳にする。三村は同じ埼玉県の県立高校で24年の教職経験をもつ、キャリア教育界の著名人。直接の面識はなかったが、キャリア教育に興味をもち始めていた小境は心を動かされた。

「キャリア教育に触れてはいたものの、入

り口だけ知っていて中身がよくわからない状態でしたから、深く学びたいと思っていました。そんな時、三村先生が『今度、教職大学院ができるから早稲田にどうですか』と、さらっと話されたものですかから、私でもできるだろうか、といった気分になったんです」

小境は、すぐに説明会に行き、進学のための準備を始めた。何十年ぶりの面接試験で緊張はピークに。志望動機を問われ、「大学院での学びを、これまでの実践を見直し、検証する機会にしたい」「理論的な裏づけが欲しい」「指導の軸となるものが欲しい」と立て続けに訴えた。当時、小境は50歳目前。年若の面接官に勢いあまつて「私、このままで終わりたいくないんです。残りの10年を消化試合にしたくないんです」と声高に発した。あとになって、自分の口から出た言葉のおかしさに、笑いが込み上げてきた。

ただ、年齢に関して、三村は言う。「修了したあとだって、定年まで10年弱もあります。まだまだ学んだことを現場で生かせる年齢です」

こうして小境は、早稲田大学教職大学院の教職研究科1期生となった。同期には、学部から進学したいいわゆるストレートマスターが約40人(社会人経験者含む)に加え、小境と同じ現職教員が13人いた。うち半数は、東京都や近隣県からの派遣

だが、小境のように休職を願い出て、自費で通学しているケースもあった。同大学院の場合、現職を対象にした1年制課程が設置され、通常の半分の期間で修了できたとはいえ、無給かつ授業料も安くはないため、かなりの痛手だ。

朝から晩まで続く授業はついでいくのに必死。特に、三村の論文指導は厳しく、ダメ出しのコメントで埋め尽くされた。

「こんな私を見捨てることなく、徹底的に面倒を見ていただき感謝しています。が、当時は、何でこんな道を選んだのかと後悔し、泣きながら頑張っていました」

三村は、小境の当時の様子を思い出す。「ずいぶん凹んでいたようですが、教職大学院の1年めで手探りであったうえ、早稲田の場合、1年間しかないため荒療治が必要だと思ひ厳しくしました。その後、

彼女は多くの論文を書きましたが、その下地は、この時できたのだと思います」

事実、論文を書く訓練によって、得たものは大きいと小境は言う。

「論文を多く書いたことで、現場に戻ってから、現状を認識し、課題をみつけ、解決策をみつけるといふ手順が踏めるようになりしました。例えば、生徒が良くない状態の場合、今ままでしたら『ああ、だめだ、大変だ』で終わっていたかも知れません。それが、問題の所在を明らかにし、次にどうすればいいのか筋道を立てて考えられるようになりました」

模擬授業では、若い学生から授業改善のさまざまなアドバイスを受けた。曰く「答えを誘導するところがあるから、ワンクッションおいて考えさせたほうが良い」

「あそこは教えるのではなく、調べさせた

ほうが良い」など。同じ学ぶ者同士、年の差など関係なかった。

「自分の授業のやり方が最善だとは思っていませんでしたし、頭も固くなっていますから、そうした指摘をもらえたことに感謝しています」

P D C Aサイクルや学びの共同体などの新しい教育手法に触れ、特別支援教育やカウンセリング技法、教育行政の動きなどについても学んだ。カリフォルニア州や上越市への研修にも同行した。米国では、高度に分業化された教育システムや、リアルティのある授業に感心し、上越市では、先進的な小中高大の連携事業を間近にし、教育には学校や家庭だけではなく、企業や行政、NPOなどさまざまな人がかかわっていることを知った。

また、校種や地域を異にするさまざま

かかわった すべての子が 幸せになるように



上.女子バレーボール部の練習風景
下.講座「商品開発」で作られた岩商ブランドの和菓子



上.三村隆男教授らと上越教育大学にて
下.日本進路指導協会「進路指導研究協議全国大会」にて

な現職と交流することで視野が広がった。熱い志をもった人たちが各地で頑張っていることを知り、パワーをもらった。この点について三村も言う。

「教職大学院は、今までの教育実践を棚卸して、理論づけしながら、もう一度積み上げる場です。それと同時に、学ぶ者同士の絆やネットワークを作り上げていく場でもあるんです」

実際、大学院修了後は、三村の引き合いもあり、日本キャリア教育学会をはじめ、公私のさまざまな研究会で、実践について発表する機会が多く回ってきた。そうした依頼がある都度、「私で、いいんですか」と小境は気後れしたが、持ち前の好奇心と、そこで受ける刺激を期待して、前向きにチャレンジするようにしている。

このように、思いがけず世界が広がって

いったのは、間違いなく大学院での1年間があったからだ。

学びを実践に生かす

こうして大学院を修了した小境は09年、1年ぶりに岩商に戻ってきた。

「これまで闇雲にやっていたことに理論的な裏づけができたことは大いに自信になりました」

だが、学んだことを現場ですぐに生かせるかという点に難しい。小境は、学期ごとに1回、計3回にわたりキャリア教育研修会を校内で開いたが、意気込みとは裏腹に、理論に偏りがちな話は、自分でもどこか浮いているように感じた。

リーダーシップや押し強きの強さを、伝える力の欠如を自覚している小境は、まず自分

自分の足元から すべきことを するだけ

の教科の中で、学んだこと、とりわけPDCAサイクルを回すことから始めた。新しい教材に入学することに学習目標を明確にし、生徒には、この教材でどんな力をつけたいかを設定させてから授業に入る。終了後、自己評価の時間を設け、学習目標と自分の目標の2つについて、どの程度達成できたかを振り返らせる。

「小説や評論を漠然と読むのではなく、何に注意して読むべきかを示すことで、また、自分なりの目標を立てることで、主体的に授業に取り組み姿勢を身につけさせたかったんです」

インターシップの事前・事後学習の充実など、授業以外の実践も、キャリア教育の視点から見直していった。

「岩商起業家派遣塾」では、それまで、講師の話聞き、感想を書かせて終わりだ

ったものを、メモを取り、質問を考え、要点を新聞の体裁にまとめ、ほかのクラスで発表するようにした。聞く・書く・話す能力を同時に伸ばそうという試みだ。

年度末の学年集会では、年間の学年の指導内容を順にスライドで見せることで、1年間を振り返らせた。終わったことをそのままにせず、多様な体験を経て、今の自分があることを自覚させたかった。

こうした取り組みに加え、大きく変わったことがある。生徒対応の変化だ。

「まず、生徒の答えを辛抱強く待てるようになりました。待つ時間は長く感じるものですが、その間、生徒は何もしていないわけではなく、一生懸命、頭を動かしているんですね。大学院で生徒の立場になったことで、その気持ちを思い出しました」

同様に、生徒の取り組みを冷静に見られるようになったとも言います。

「今までは、何かあると、ついすぐに注意をしていましたが、それを改めました。注意することによって、生徒自身が気づき、自ら改める機会を奪っていたかもしれないからです」

進路指導のスタンスも変わった。

「以前は、何かにつけ、『大丈夫、頑張れ』で終わらせていたかもしれませぬ。でも、高校生が卒業してすぐ社会で働いて大変なこと。頑張れだけでは済まない状況がたくさんあります。ですから、ピンと張

り詰めた状態で送り出すのではなく、たわみを持たせながら、「そうだね。大変なことでもいいあるよね。大変だけど、頑張ってみるか」と、共感的な態度で送り出せるようになりました」

商業科の取り組みと連携

小境の復職後、岩商における地域連携・産学連携の実践は、ますます充実してきた。3年次の課題研究では、地域活性化を目的とした「いわつきプロデュース」という講座が新たに加わった。

10・11年には楽天市場とのコラボ授業「楽天IT学校」が開講。11年からは、学校・学科の枠を超えた近隣3校（今年度は2校）合同で商品開発を行うプロジェクトが始まったうえ、高校生が運営するインターネットショッピングモール「岩商まなびや」もスタートしている。

実践を牽引してきたキーパーソンが相次いで異動したこともあり、課題も抱えているようだが、こうした活動は、学校の活性化や、生徒のモチベーションアップにつながっている。何より、勤労観の醸成や、社会で役立つ力の育成など、進路に結びついている点で注目に値する。このような体験を通じてしか学べないことは多い。商業科主任の外崎は言う。

「例えば、3校合同による商品開発では、

農業高校の生徒の食材に対するこだわりと、食物調理科の生徒から作る作り手としての意見と、本校の生徒が学んできたビジネスの考え方が相容れないことがありました。それぞれこだわりがあり、自分たちの主張を簡単には曲げません。それでずいぶん衝突がありました。学校に戻ってくると愚痴だらけ。私としては、『立場が違えば、意見もやり方も変わる。社会でも同じなわけで、それがわかっただけでも勉強になったね』となだめるのですが、それで終わらずわけにもいきません。そこで、どうコミュニケーションすれば衝突を避けられるかという流れになり、『顔を合わせるとケンカになるから連絡はメールでしよう』という意見がでたり、『でも、表情を見ないと相手の反応がわからないね』ということでもテレビ会議システムを使ったり。そのうち、自分の話し方を反省し、相手の立場を尊重する生徒も現れるようになりました」

こうした気づきは、小境がインターシツほかキャリア教育を通じて生徒に感じてほしいことと本質的に変わらない。

「改めて話を聞くと、すごい取り組みをしているのだなと感心するとともに、生徒を見る目が変わってきました。生徒の顔は多面的であり、私が見ているのは主に国語の授業で見せる顔。そうではない面を商業の先生方は見ていたことを、改

めて知りました」

もったいないのは、連携の不足から、商業や情報処理の授業についての詳細や、そこで生じている生徒の成長について、断片的にしか耳に入っていないことだ。

「今後、商業あるいはほかの教科も含め、共通の認識をもち、より多く情報交換をするようになれば、それぞれの実践に深みが出てくると期待しています」

● 定職に就きたくても、高校卒業資格がないため、あるいは読み書きすら満足にできないため、非常に不利な状況に置かれている40代、50代の人が大勢いる。なんとかしたいが打つ手はない。

行政で就業支援に携わっている身内が話す実態だ。こうした話題になると、小境はいつも、身につまされる。

「生徒にはよく10年後の姿を想像して進路選択をしようと言っています。けれど、本当に大変になるのは、その先の年代であり、そこまで見据えた指導をしていく必要があると痛感しています」

微力な自分にできることは、一人ひとりの生徒にとこ

とんかかわり、最低限、社会で生きるために必要な力を身につかせたうえで、高校を卒業させること。

「キャリア教育が、社会で自立して生きるための能力育成の教育であるならば、国語という教科を通じて、読む、聞く、書く、話すといった基本的な力をつけていくことはキャリア教育そのもの」

● そう信じ、自分の足元から、やるべきことをやっというと思う。（敬称略）

